江戸時代末期における
甲府盆地上今井村の生業

菊池万雄

まえがき

対象とした上今井(かみいまい)村は，古くから水田皆無の畑作専業のところであった。耕地面積や土地生産性その他について盆地内の他村と比較しても，優位な点がみられない村であった。

しかし，そうした中で，村の人口推移をみると，全国的傾向や盆地内他村に比べて増加の傾向がみられる。そこで，ここでは，その人口増加の背景に農業以外に商業活動があったのではなかろうかと注目してみた。

その結果，為政者の保護，換金作物の栽培，行商，特産の綿や煙草の問屋などがあって，貨幣経済の浸透とともに盛んになった商業村の性格が察せられ，それが村の人口をささえてきたものと考えられた。

甲府盆地における生産活動については，すべて，東部からはじまって西へ移行したとみるのが，過去から現在までの一般的傾向である。すなわち，養蚕業にしても，果樹栽培・農産加工・家内工業なども，すべて東に興って西へ移行するという，先進地の東に対する後進地の西というのが，盆地内における産業から生活様式変容にいたるまでの共通事項である。したがって，盆地内における西部地域の後進地的性格は，古くから現在まで受けつがれ，土地生産性の面でも東部が高く西部に低いのは当然とされてきた。

対象とした上今井村は，その土地生産性の低い甲府盆地西部の扇央部という自然環境下にあり，土地利用上は水田皆無という制約のもとで，原七郷として武田家統治下にあって畑作特産の免許・保護奨励を受けた昔から，昭和の現在まで，畑作専業の特色

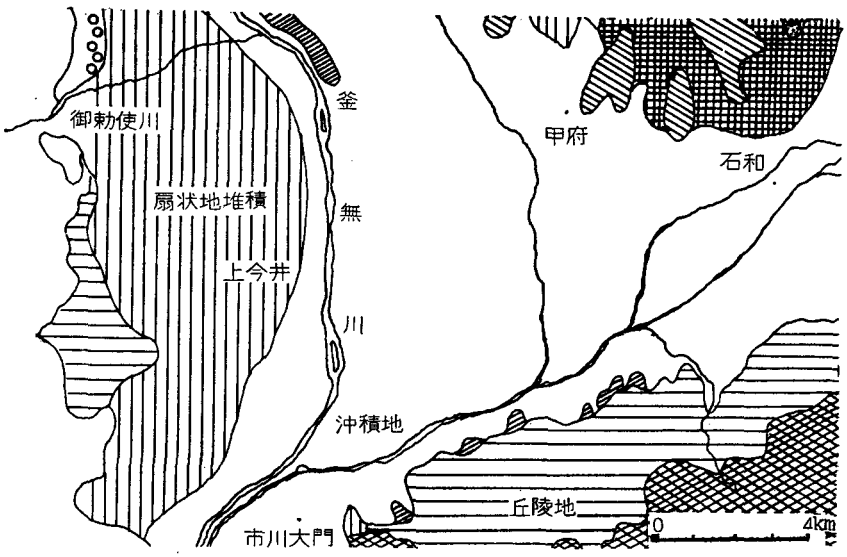

図1　甲府盆地および周辺の地形・地質（『山梨県地質図』により筆者作成）

表1　甲府盆地における石盛分布

郡	村	上田	中田	下畑	下々畑	屋敷	明細帳年
山梨	等々力	19	17	10	7	12	不詳
	上於曽	21	18	10	8	12	享保 9
八代	下岩崎	21	19	12	8	12	享保 14
	上岩崎	20	18	12	8	12	宝暦 10
	土塚	20	18	12	8	12	元文 1
	市川大門	21	18	8	7	—	享和 3
巨摩	下条東割	18	15	7	5	—	天保 9
	上今井	—	—	7	4	—	文化 13
	吉田	—	—	8	5	—	天保 9
	成嶋	20	18	12	10	—	〃 8
	臼井河原	—	16	8	6	—	〃 9
	谷戸	15	12	3	1	—	〃 6
	柳川	12	10	2.8	1.5	11.5	享保 9
	飯富	—	13	2.5	1.4	—	元文 3
都留	藤崎	15.5	11.5	7.5	5	11.5	天保 9
	川合	—	—	8	5.5	13.5	〃 13
	四方津	—	—	7	4.5	11.5	延享 3

ある村であった。

I　甲府盆地内における上今井村

地形図・地質図[1]で明瞭な如く(図1)，この村は御勅使川扇状地の扇央部に位置する村で，古来水田皆無の畑地村として特色づけられているところである。このような畑作専業の状態が，江戸時代から昭和の現在まで継続されてきたことは，水田経営を困難にしている潜在的な自然環境によるものであることもうなずかれる。扇央部という位置は，土地利用のみ

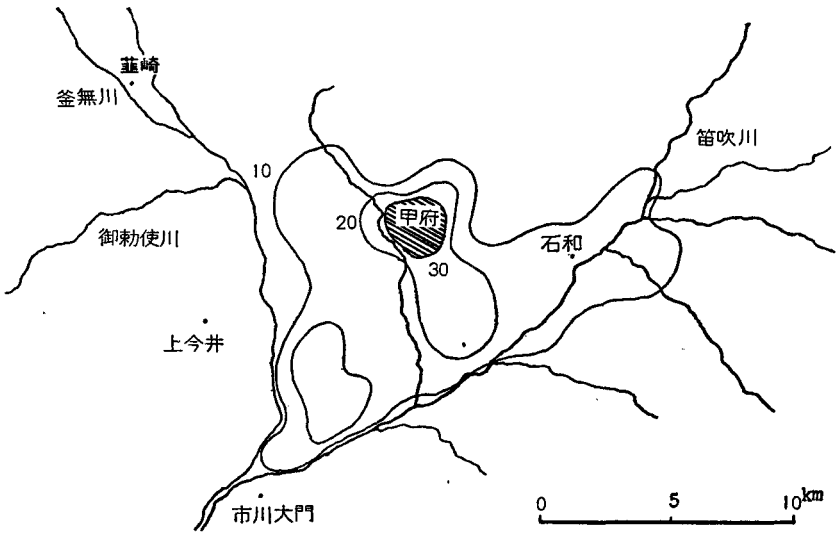

図2　1戸平均の高分布（文化15年）

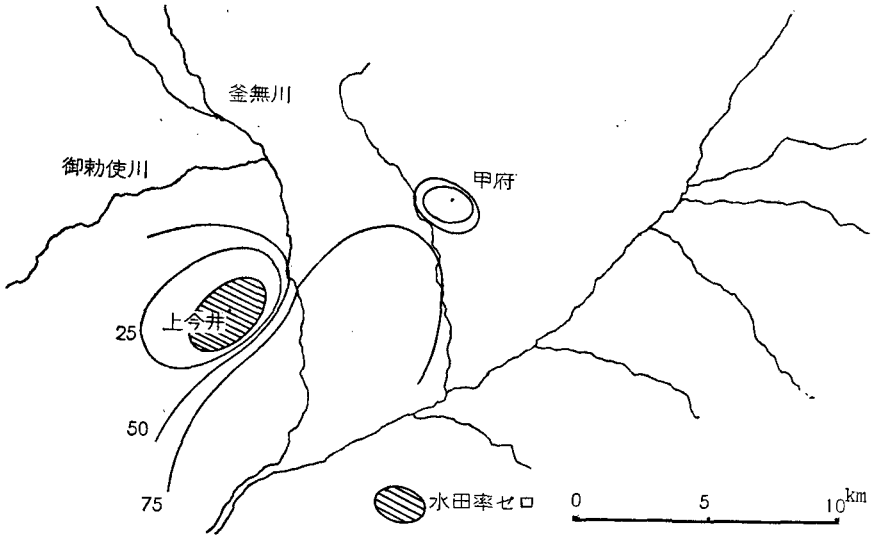

図3　水　田　率　分　布

ならず，自然災害としての洪水や地震などの災害時に緩衝的役割を果たした点もあったが，総じて，土地生産性の低さは否めない事実であった。

甲府市に近接した近郊村として，果樹をはじめ野菜その他の換金作物の集約的経営や，農産加工および農村家内工業や，販売業務と多角的経営が可能な現在と異なり，江戸時代における畑地村の経営は，決して容易なものでなかったことが推察される。

そのことは，武田家統治下で，すでに原七郷村として武田家免許の特産物指定保護のあったこと[2]や，図2にみられる如く，江戸時代の1戸平均村高および，石盛[3]の分布によっても推察することができる。すなわち，表1にみられる如く，盆地内における中央部水田村では，上田20～21の石盛がみられるのに，御勅使川扇央部の畑地村上今井・吉田など原七郷村では，水田皆無(図3)の上に，畑作でも山間地域の都留郡以下であるなど，きわめて土地生産性の劣悪であった点が指摘できる。

こうした悪条件への対応を余儀なくされた耕地売渡および質地や金子借用証文などを，幕末から明治5年までについて整理すると，田畑売渡証文（明和3～天保5年)および畑売渡証文(天明2～明治3年)29点，貸地証文・証書(嘉永6～明治5年)27点，金子借用証文(寛政3～明治3年)32点などがみられ，生産活動の面での不安定が察せられる。

なお，このほかにも小物成林売渡証書があり，宝暦13年の明細帳にみられる，

一，畑質入質値段　上畑壱反ニ付甲金弐両弐分位
　　中畑壱反ニ付甲金弐両位
　　……

の耕地質入が慣行になっていたと察せられる点や，嘆願書[5]にみられる「慶応元年　巨摩郡二十七ヶ村江尻宿助郷　免除歎願……耕作骨折取実少く……」など，随所に困惑の体がみうけられ，この地域の村村が耕地経営にあたって，いかに困窮したかを裏付け立証するものである。

II　上今井村の人口推移

江戸時代における人口推移については，関山直太郎[6]・高橋梵仙[7]の業績があるが，その一般傾向として，享保6年を100とした指数では，弘化3年が103となり，ほとんど横ばいの状態が全国人口の趨勢とされている。

御勅使川扇央部に位置する原七郷村々の人口推移を，甲府盆地における他地域と比較すると，まず甲府城下の三日町[8]，城下近郊村西青沼[9]および盆地中央

表2　上今井村の人口推移

		上今井		吉田		甲府三日町	西青沼	成島			上今井		吉田		甲府三日町	西青沼	成島
	年	軒	人	軒	人	人	人	人		年	軒	人	軒	人	人	人	人
1726	享保11					620			19	文政 2	133	568					
33	18	112	503						20	3	130	547					
44	延享 1	106	495						21	4	130	554				74	348
46	3						91		23	6		569					
48	寛延 1					560			1824	7	132	575					
1751	宝暦 1			116	446				28	11			128	585			
60	10			113	454				29	12	131	575					
63	13	126	569						30	天保 1	130	568				83	
64	明和 1	116	566				79		31	2	128	581					
68	5					522			1832	3	128	584					
1774	安永 3					524	81		33	4	132	608			485		
79	8		570						34	5	130	618					
80	9		566			536			35	6	130	605					
81	天明 1		564						36	7	126	623					
82	2		576						1837	8	129	627					369
1783	3		571						38	9	127	612	128	564			
84	4		561						39	10	125	594					
85	5		561						40	11	125	632			499		340
86	6		569			526			1842	13	124	617					
88	8		566						43	14	124	617					338
1789	寛政 1	127	560						44	弘化 1	124	633					
90	2		559						45	2	124	640					
91	3		563						46	3	129	656			564		
92	4	131	558			524			1847	4	128	661					
93	5	131	576						48	嘉永 1	128	681					
1794	6	131	547						49	2	125	697					
95	7	131	558						50	3	124	702					
96	8	131	550						51	4	125	711					
97	9	133	597						1852	5	125	738			555		
98	10					496			53	6	125	756					
1799	11	132	586						54	安政 1	125	722					
1800	12	134	594						55	2	125	742					336
01	享和 1	135	561						57	4	127	725					
02	2	135	549						1858	5					562		
03	3	128	569						61	文久 1			127	684			
1804	文化 1					366			62	2	128	702					
05	2			123	440				64	元治 1					531		
10	7					468			66	慶応 2	132	626					
12	9	132	549						1875	明治 8	136	753					
16	13					468			76	9	136	769					
1817	14	134	583														

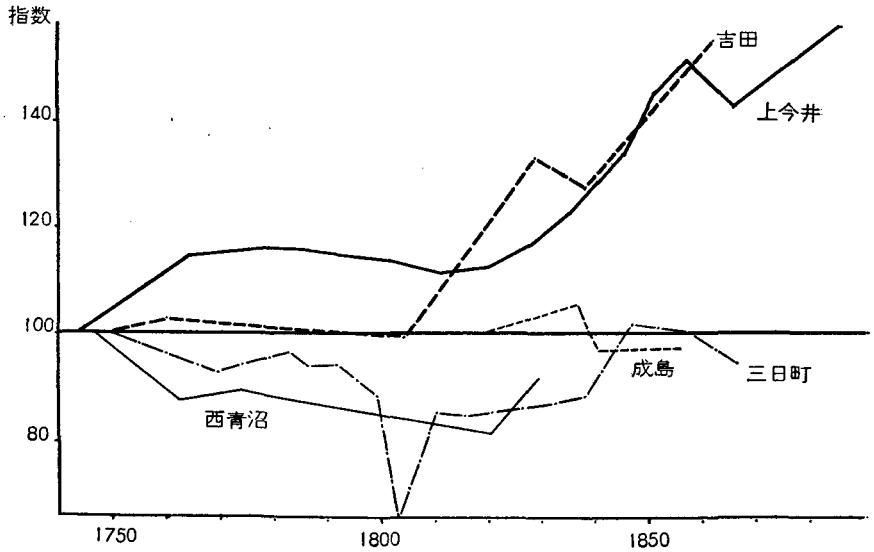

図4　甲府盆地における村々人口推移（上今井<延享1年>を100とする）

表3　上今井村人口動態

年	総人数	増減	出生	死亡	他所より入人	出人	年	総人数	増減	出生	死亡	他所より入人	出人
文政 4	554	7	7	7	9	2	天保 9	612	−15	11	27	5	4
7	575	6	9	8	8	3	11	632	16	12	9	7	3
8							14?	617	−21	15	24	3	7
9							弘化 1?	633	16	18	11	3	5
10	545	9	12	4	6	5	2	640	7	16	11	7	5
11	555	10	16	7	7	6	3	656	16				
12	575	20	22	12	13	3	4	661	5	22	18	5	4
13	568	− 7	7	9	5	10	嘉永 1	681	20	24	5	4	3
天保 2	581	13	27	15	6	5	2	697	16	20	4	3	3
3	584	3	18	13	6	8	3	702	5	18	16	5	2
4	608	24	23	5	11	5	4	711	9	18	13	6	2
5	618	10	21	5	5	11	5	738	16	20	10	11	5
6	605	−13	10	31	10	2	6	756	17	37	18	3	5
7	623	18	26	14	8	2							
8	627	4	17	15	8	6	計			455	311	164	116

注）？のついた年は不合

の水田村成嶋[10]が，全国傾向あるいは漸減傾向を示している。これに対し，扇央部の上今井・吉田両村が，幕末まで漸増傾向を示していた(表2)。このことは，石盛が20〜21という全国平均よりも高い生産性のある優位の地域において，人口漸減現象がみられる中で，前述の如く土地生産性の低い，人口可容力の低いはずの扇央地域で人口漸増現象(図4)のみられるのは注目に値する点である。

そこで，表3によって上今井村の人口急増の内容を検討すると[11]，

①他所よりの入村者が，自村からの出人よりもはるかに多いこと

②出生による自然増が著しいこと

の顕著な点が指摘できる。

前者は，衰退傾向の村，土地生産性の低い村に起る現象とは思えないことで，人口を吸引する何らかの因子の存在を意味するものである。また，後者の出生数の多いことによる自然増加は，可働年齢層の多いことが前提であり，村の生産活動の基盤が充実していたことを意味するものである。

このようにみると，土地生産性の低い悪条件下の自然環境にもかかわらず，人口増加という矛盾した現象がみられることから，人口増加を決定づける背景のあったことを把握する必要がある。

Ⅲ　商業村としての上今井村

宝永2年「上今井村諸色明細帳」に，

家数　79軒

人数　413人

牛馬　34疋

……

御年貢米之内三ヶ一　小切金納

……畑作之儀　たばこ　木綿　粟　大豆

商人　38人

……耕作の間　男ハ薪とり　女ハ木綿稼

……

とあり，この頃すでに，商品作物がみられ，副業が一般化して，家数・人数に比較して牛馬・商人の多い点が注目される。

宝暦13年「差出明細書上帳」にも，

一，余時物　ねぎ　牛房　柿　所々に売出し申候。

一，農業之間　男ハこやし薪取　又ハ塩茶等商売仕……　女ハ木綿布いたし候……

とあり，宝永2年に，商業従事について記されてある。

また，「諸書上物控写帳」(文化13～嘉永7年)にも，

……原七郷七種産物

一，渋柿　一，椚薪　一，牛房　一，大根　一，冬葱　一，胡蘿蔔　一，煙草

と，畑作以外に柿・煙草の特産をあげ，さらに，

右七産物と申伝へ来候ハ　私共村方組合原七郷と唱　貸畑場ニハ往古御勅使川悉く砂川淵之場ニ而　至而地味悪敷極難渋之土地柄故　百姓作間ニハ右七種四方江売捌御収納之手当ニ仕来リ申候

天保八酉年　十月

上今井村　名　主　次郎右衛門

長百姓　庄左衛門

百姓代　幸左衛門

市川御役所

と，近在へそれらの商品を売りさばいたことが記されてある。

上今井村を含む西郡筋原七郷は，武田家統治以来特殊な地域として注目されていたことは，武田家御免許の「乍恐以書付申上候」にある，

一，草物類

取替穀凡八百俵　夫喰足合

但シ三郡野売雑売穀〆

此代金凡六百両

金凡四百五拾両

但シ甲府市中幷在々売上〆

一，煙草凡千百箇

但シ壱俵ニ付七貫弐百目入

代金凡八百弐拾五両

但シ拾ヶ年平均直段

一，木綿凡七百本

但シ壱本ニ付十弐貫目入

代金凡八百七拾五両

但シ拾ヶ年平均直段

一，藍葉凡千貫目

但シ壱貫目ニ付甲銀弐

代金凡五拾両

但シ拾ヶ年平均直段

……

右売捌背負商人

上納　一．永　七貫五百文　原七郷組合

慶応三卯年九月廿三日

原七郷村々惣代

在家塚村長百姓　伝重郎

上今井村長百姓　九右衛門

沢登村名主　重兵衛

桃園村長百姓　惣左衛門

西野村名主　用蔵

上八田村長百姓　源右衛門

吉田村長百姓　重兵衛

十五所村長百姓　兵右衛門

小笠原村長百姓　利左衛門

市川御役所

は，これらの村々が古くから商品作物栽培とその背負売捌きの特権があったことによっても知ることができる。

なお，表4によって，明治初期における当該村の物産をみると，畑作特産の商品作物に依存する面が大きかったことを具体的に指摘できる。すなわち，綿(操綿・篠巻・木綿布)と，煙草のみでも，全村生産額(919円)の3分の1以上(563円)を占め，穀物生産額512円を上回っている点に注意したい。しかも，残る他の生産高を占めるほとんどは，柿・桑・藺・養蚕紙・藍・荏・菜種・梅・李・梨・竹の子など商品作物であるという特色があって，商業に依存する面の大であったことを物語っている。

表4　巨摩郡第26区上今井村物産書上

麦　上	85石	170円
〃　下	64〃	112〃
小麦上	5〃	12〃50銭
〃　下	5〃	10〃25〃
大　豆	16〃	44〃
小　豆	2〃	10〃50〃
あ　わ	50〃	62〃50〃
そ　ば	27〃	59〃40〃
き　び	12石	9円
ひ　え	20〃	15〃
えん豆	5〃	7〃50銭
しょうゆ	10〃	25〃
操　綿	200貫	230〃
木綿実	50〃	2〃
甘　諸	2000〃	50〃
かき生	3200〃	48〃
煙　草	720〃	180〃
桑	200〃	8〃
たきぎ	3100〃	21〃70〃
藺	43〃	53〃75〃
み　そ	40〃	40〃
大根他	1020〃	30〃50〃
養蚕紙	169枚	21〃12〃
あ　い	300貫	30〃
荏	8斗	2〃
菜　種	12斗	4〃20〃
篠　巻	860貫	150〃
木綿布	200反	3〃
鶏　卵	60	36〃
馬	3匹	15〃
梅	15斗	1〃50〃
すもも	5〃	50〃
梨	500個	50〃
竹の子	500本	75〃
合　金		1519円003厘3毛

(原文のまま)

右ハみずのととり年12月より当いぬ年12月までの産出諸物品員数書面之通書上候也

明治7年12月

第26区上今井村戸長　中込　九右衛門

副戸長　津久井新左衛門

山梨県令　藤村繁朗殿

Ⅳ　大福帳にみられる商品取引

安政4年「西郡筋上今井邑中込九右衛門方大福帳」をみると，内容は木綿および煙草(莨)の集荷と販売

のメモ帳で，

正月十二日　一，操綿　　壱本

　　代八拾壱匁　　金弐両壱朱渡

二月朔日　　一，操綿　　六玉　　嘉助

　　代二月十五日　　金壱両渡

……

十月廿一日　一，本葉　　弐箇

　　代銀五拾壱匁　内金壱両手附

　　一，間葉　　五箇

　　代金壱両弐分弐朱

　　内金壱分手附

　　廿三日　内金壱分弐朱渡

　　廿七日　内金弐分渡

　　廿九日　内金壱両渡

　　十二月十八日　引残金弐分ト

　　三百八十壱文

　　豊之助江渡

　　〃

……

とあり，問屋制家内工業における問屋のように集荷し，一部手附金を渡し後で清算していたことがわかる。メモから操綿および煙草について買方（表5）・煙草売方(表6)の如く整理すると，図5にみられる如くである。すなわち買方には煙草の生産収穫，操綿の生産収穫加工を裏付ける月別集荷状況がみられるのに対して，販売には年末にピークを示しながらも買方に比較して，売方の平均化している点が明瞭である。しかも，集荷先は，村内をはじめ周辺近隣とノーマルなタイプをなしているが，販売先は釜無川・富士川に沿って南北に長く分布し，内陸河川交通との関連が察せられる。

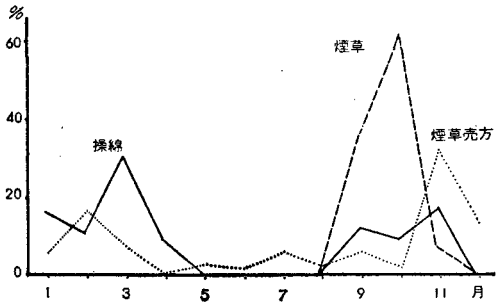

図5　操綿・煙草の月別売方と煙草売方(『中込家大福帳』による)

表5　「中込右衛門方大福帳」による操綿・煙草の取引(銀匁に換算)

(操綿) 買　方		(煙草) 買　方	
	匁		匁
1／16	144	9／26	1,024
19	144	20	33
23	42		1,057(9月計)
24	13	10／1	32
〃	13	〃	37
	356(1月計)	〃	13
2／1	13	29	128
1	64	10／3	160
11	103	〃	78
11	23	〃	1
13	45	4	52
	248(2月計)	〃	51
3／1	88	〃	69
〃	45	12	47
16	147	7	53
23	83	〃	64
〃	128	〃	27
〃	211	〃	40
	702(3月計)	15	13
4／2	128	〃	24
13	64	〃	13
	192(4月計)	〃	16
9／3	64	〃	51
7	64	23	102
28	64	26	144
〃	64	〃	45
	256(9月計)	〃	80
10／5	12	〃	69
6	192	〃	156
〃	8	〃	320
〃	2		1,885(10月計)
	214(10月計)	11／20	10
11／18	128		128
〃	288		138(11月計)
	416(11月計)		
計	2,384匁	計	3,030匁

V　大福帳以外にみられる商業取引

山梨県立図書館所蔵の上今井村取引関係文書 165通(除大福帳・日記帳)のうち，煙草(莨・烟草)と明記してある57通について考察すると，年代は不詳のものが多いが，記入分については，安政・万延・慶

表6　煙草売方（『中込九右衛門方大福帳』による）

月　日	売　　方	月　日	売　　方	月　日	売　　方
	匁		匁		匁
1／13	648	7／4	117		619(9月計)
	648(1月計)	〃	28	10／16	54
2／20	96	〃	177	23	55
23	231	25	200	25	100
24	80	〃	7		209(10月計)
〃	176	〃	20	11／1	77
〃	368	9	47	4	36
〃	32	12	24	〃	336
〃	176	〃	12	2	1,728
〃	176		701(7月計)	〃	421
〃	80	8／12	21	4	128
〃	48	13	21	19	512
〃	139	〃	40	21	96
〃	304	〃	15	23	32
〃	1,906(2月計)	〃	40	〃	112
3／11	448	〃	56	24	32
16	15	22	26		3,510(11月計)
〃	371	27	4	12／7	448
7	89	〃	40	29	8
	923(3月計)	〃	4	〃	384
5／24	46	4	73	〃	192
17	68		340(8月計)	〃	75
15	85	9／1	51	〃	75
17	72	〃	42	〃	128
〃	42	〃	16	〃	192
〃	10	〃	6	〃	15
〃	13	4	42	〃	19
	336(5月計)	〃	16		1,536(12月計)
6／8	160	〃	164		
30	48	6	34		
	208(6月計)	12	149		
7／4	69	23	99	計	10,936匁

取引先：桃園，雪，吉田，龍王，鍛冶屋，川浦，中萩原，金谷，岩淵，十五所，十日市場，西野，下今諏訪，沢登，鰍沢

応・明治と幕末から明治初期のもののみで，その取引先は甲府城下をはじめ，盆地内各地におよんでおり，さらに，北は信州各地，南は岩淵・清水・島田・沼津，東は江戸から総州まで，

送り状之事

一，天切　申　西本　拾箇

右之通積立候間改御請取大急御積立之義奉願上候　以上

萬延二酉年二月廿三日

甲州西郡上今井村

中込九右衛門

青柳河岸小川内太郎左衛門殿

岩淵　　花田幸八殿留

の如き送り状が残されている。

煙草以外の取引商品についても文書には，木綿（木綿種）・呉服・紙・塩・酒（種粕）・材木・瓦・金物など衣食住に関する必需品があり，これらのうち，特産物として輸送されたものには木綿（木綿種）・材木・紙・酒（酒粕）などがあった。その取引先も近接村の下今井・荆沢・十五所・鏡中条・下今諏訪・古市場・落合・西野・市川から，西の清水・東の小田原・江戸・木更津と広範な取引圏を有していた。

なお，商人としての取引上の書簡58通についてみると，その通信相手は甲府盆地内村々がほとんどあるが，前述同様に，清水・沼津・小田原から江戸・木更津と広範な取引先であったことが察せられる。

また，嘉永6年の「上今井村惣兵衛　諸国霊場巡礼ニ付往来手形」をはじめ，長百姓英左衛門ほか村人の旅行届があるが，その旅行先が伊勢・遠州・武州・信州ほか諸国とあって，敬神崇祖のみならず上

今井村全村に経済的余裕さえみられる点が注目をひく。

あとがき

上今井村の近世末における商業依存の高かったことは，貨幣経済の浸透の大であった当時の世相として容易に察せられるところであるが，その商業活動が水田皆無の畑作専業村の悪条件を克服して，人口増加の素地になったことも確かであろう。

中込九右衛門と上今井村名主との関係は不明とされている[13]が，村内における問屋の如き経済支配の地位にあったことは容易に推察される。彼は村を代表した経済人であり，その活動は村民を盆地内外の他地域との交易にあたらせ，商業村として上今井村を意義づけた功績はきわめて大きいと考えられる。

（日本大学文理学部）

〔注〕

1）山梨県治山協会『山梨県地質図』1：150,000

2）「乍恐以書付奉申上候」武田家御免許（山梨県立図書館所蔵文書，以下古文書はすべて同館所蔵のもの）

3）山梨県立図書館『甲州文庫史料』4，1975

4）山梨県立図書館『古文書目録』1，1974

5）山梨県立図書館『甲州文庫史料』5，1976，269頁

6）関山直太郎『近世日本の人口構造』吉川弘文館，1969，123頁

7）高橋梵仙『日本人口史之研究』 1，日本学術振興会，1971，153頁

8）土田良一「近世甲府三日町の人口動態」人文地理，31—6，1979，73頁

9）明和元年「甲州山梨郡西青沼村諸色銘細帳」他

10）文政4年「御尋ニ付書上帳　巨摩郡成嶋村」他

11）寛政2年「年々宗門人別控帳」
文政4年「年々宗門差引帳控」
宝暦13年「差出明細書上帳」

12）胡蘿蔔（こらふく）は人参の異名(山梨県立図書館，飯田文弥氏助言)

13）山梨県立図書館『古文書目録』1，1974，100頁